

KIDS SMILE LABO JOURNAL *September*



かけがえのない時間

子どもたちは LABO の日常の中で、「やってみ
たい」という思いを形にしなが日々を過ごし
ている。

そのひとつの大きな節目が、年長児だけが経験
する「お泊りキャンプ」だ。

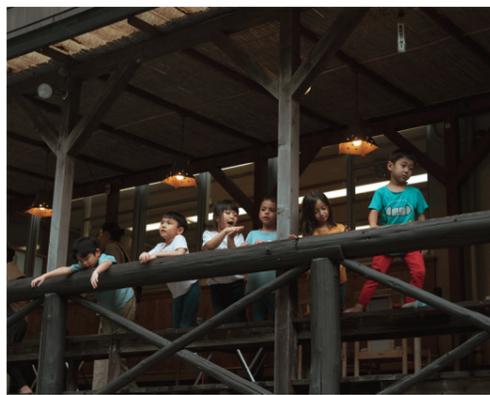
一泊二日という短くも長い時間。そこでの出来
事は、子どもたちにとって新しい発見や気持ち
の芽生え、自分や仲間と向き合う大切な体験と
なった。

初めてのことに挑戦するときには、子どもも
大人も緊張する。お泊りキャンプの中にも、
そんな瞬間がいくつもあった。けれど、その不
安を支えてくれる仲間や大人の存在があること
を、子どもたちは実感しただろう。自分ひとり
では越えられないことも、一緒なら越えられる。
その心強さを知った時間だったに違いない。

私たち保育者にとっても、この二日間は特別
な時間だった。長く共に過ごす中で、普段の園
生活とはまた違う子どもたちの輝きに出会い、
「子ども」という存在の奥深さを改めて感じた。
まさに「その子らしく伸びていく」という園と
しての願いを、目の前で子どもたちが体現して
くれていた。

この二日間は、単なる思い出では終わらない。
きっと、いや、確かに――。

子どもたちにとっても、そして私たち保育者
にとっても、心に残り続ける原体験となった。



〈もりもり〉の愛称で親しまれている、KIDS SMILE LABO の園長。
5 歳と 2 歳、二児の父でもあり、保育と子育てに日々真摯に向き
合っている。
趣味は写真撮影で、愛用のカメラは Nikon Zf。
彼の生み出す、優しく愛で溢れる世界はnoteにて随時更新！
子育てや保育への想いも語っています。

保育園 KIDS SMILE LABO 園長 森 誉



01 / ご縁から始まった
初めての栗拾い
秋の味覚栗拾い！
どっさり 12kg 収穫しました。

02 / 乳児クラストピック
この夏、沢山の成長が見られた
乳児クラスの子どもたちです！

03 / 「やってみたいをカタチに」
したお泊りキャンプ
KIDS SMILE LABO で初めての
お泊りキャンプに行きました！

04 / モノの命が生まれ変わる
日本のクリエイティブリユース拠点
もりもりが訪れた「IDEA R LAB」
研修報告です。

“キッズ スマイル ラボ ジャーナル”

KIDS SMILE LABO が発行するフリーペー
パー。普段 SNS でしか見られない保育園の子
どもたちの様子や、子育てに関する情報等、
最新情報をお届けします。

kidssmilelabo.com



@kidssmilelabo @kidssmilelabo KIDS SMILE LABO @KIDS_SMILE_LABO

Over the past month, each class has been bustling with activity. Our homeroom teachers have carefully crafted these class reports with great affection. We invite you to enjoy reading about their journey. This is the page for the classes of children aged 3 to 5.

Minamo Ozora Daichi

ご縁から始まった 初めての栗拾い

text by Reiji Akamatsu

今回子どもたちと初めての栗拾いを行いました。きっかけは、KIDS SMILE LABO の上階にある「2343 FOODLABO」のスタッフの方からのお声掛け。これまでも梅シロップ作りの際に梅を購入させていただくなど、日頃から続くご縁が今回の実現へとつながりました。

栗農園へはバスに乗って向かいます。栗の木が見えてくると「あー！」「いっぱいいる！」と目を輝かせる子どもたち。農家さんには、改めて栗の拾い方を教えてもらいました。両足を使ってイガを剥き、中身がでてきたらそれを取り出して拾う。事前に絵本や実際の写真を見たりして、今日を楽しみにしていた子どもたちは、「してるよ！」と得意な様子でした。

「みんなでたくさん拾おう！」と栗拾いをスタートし、次々に落ちてくる栗を見つけては器用に剥いて拾っていきます。自分で探して拾う子、友達と協力して探す子、栗農家さんにくっついて教わる子も。「大きいのが見つけたよ！」「レアなやつさがしてるんだ！（2つがくっついている栗）」と拾い方や狙う栗が個々で違うのも、それぞれの性格や個性が垣間見られ、微笑ましいと同時に、見守るこちらも楽しいひと時を過ごしました。

あっという間に袋が栗でいっぱいになり、帰る時間が迫ってきました。「どれだけとれたか計ってみよう！」とカゴに入れた栗は、なんと約12キロ。栗農家さんも「いつもならもっと時間がかかるよ」と驚いていました。食べられる分の栗を買わせていただき、残りは選別して厚木にある「ゆめみいち」さんに卸されるそうです。自分たちで拾った栗が市場に並ぶと聞き、子どもたちも嬉しそうにしていました。

こんなに拾ったよ！！



ほらみて〜！栗みつけた！！



チクチクのイガは足を使って剥いたよ



甘くてホクホク！ 味わった秋の味覚

翌日は、いよいよ栗を味わう日。調理さんが給食前に茹で栗を持ってきてくれました。

茹でられた栗を触ってみると、「皮が硬い！」と気づき、剥いて見せると黒い皮があり二重になっていることにも気づきました。いよいよ自分たちで拾った栗を食べる瞬間です。スプーンで栗をほじりながら食べてみると、「甘い！」「めっちゃおいしい！」「おいもみたい！」とホクホクで甘みのある栗に大興奮。あっという間に食べ切ってしまう、「おかわりない？」と声を上げる子もいました。楽しみにしていた栗ご飯もおやつに登場。「おいしい！」「さっき（茹で栗）より甘い！」と、茹で栗との味の違いを感じる姿も見られました。

初めての栗拾いを通して、自然に触れる喜びと、収穫したものを食べる楽しさを存分に味わった子どもたち。

「拾う」「食べる」だけでなく、発見や驚き、季節を感じる体験が心に残る一日となりました。

おいしいね〜♪



おいしくて
ほっぺたがちぢら！



ぼくたちが拾った栗だよ★



どっさり 12kg！！



2歳児のお友達と
同じ重さでした〜！

Nobana

友達と広げていく世界

暑い日が続く、室内で同じ遊びを繰り返す毎日の中で、自分の世界観を友達と共有する姿が見られるようになったのはなさん。恐竜のフィギュアを使った遊びも、最初はままごとのキッチンを操縦席に見立てて「恐竜の世界にようこそ」と出発するだけでした。ところが、いつの間にか「恐竜が来たぞー！」という一声から、布をかぶって怖い恐竜に見つからないよう息をひそめる遊びへと発展。さらに最近では、一人一人が恐竜役となり、ブロックやバケツで恐竜の家を作り始めました。そこへ「ゴロゴロゴロゴロ」と新しい展開を持ち込む子が現れると、「雷だーたいへんだー」とみんなが家に隠れる遊びへ。その後も、家に火がついて消防隊がやってきたり、「どろぼうがきたぞー！」と悪者を捕まえたりと、次々に新しい物語が加わり、盛りだくさんな恐竜の世界が繰り広げられていました。

遊びが面白い方向へ発展していく姿が見られるようになりました。それは、友達の言葉に耳を傾け、流れをついたり、真似をしたりしながら、子ども同士が面白さを共感しているからこそ生まれたやりとりだと思います。ときには、自分の思いと違う展開に不満を抱き、トラブルになることもありましたが、それもまた、相手の思いを汲み取る力や、人との関わり方を学ぶ大切な経験です。これからも友達とのやりとりを豊かに、時には自分とは異なる考えも受け止めながら、友達と過ごす時間を楽しんでほしいです。

Text by Yumi Sawaguchi



Soyokaze

ことばとところを育む ごっこ遊び

子どもたちの言葉がぐんと増えてきました。おもちゃで遊んでいるときに「貸して」「いいよ」とやりとりができたり、「だめ！」「あとで」と気持ちを言葉にして伝えたりする姿が見られるようになってきました。まだ気持ちが強くぶつかり合っているトラブルになることも多いですが、「自分の思いを言葉で伝えられるようになったんだ」と成長を感じます。

最近、子どもたちと一緒に「匹のこぶた」の絵本を読んでいます。繰り返し読むうちにお話がつかりお気に入りとなり、今ではストーリーに合わせごっこ遊びを楽しむ姿が見られるようになりました。

オオカミに「お家に入れて！」と言われて思わず「いいよ」と答える子、「ダメ！」とお話通りに断る子、それぞれが自分なりの思いを込めてやりとりしています。

また、お話の中でオオカミがお尻を火傷して逃げていく場面では、追いかけて行って絆創膏を貼ってあげたり、薬を塗ってあげたりする子の姿もありました。怖いはずのオオカミに対しても「助けてあげたい」という優しい気持ちや自然と表れるところに、子どもたちの心の成長を感じます。

ごっこ遊びは、ただお話をまねるだけでなく、子どもたちがさまざまな気持ちを味わい、表現できる大切な時間です。物語の中で感じた「楽しい」「怖い」「かわいそう」「助けて」という気持ちは、友達や周りの人との関わりにつながっていきます。

Text by Yuko Furukawa



★おおきなかぶのごっこ遊びも楽しんでますよ！

Komorebi

「僕の！」「私の！」色々な気持ち

少しずつ自我が芽生え、こもれびクラスの子どもたちは色々な気持ちを表現できるようになってきました。特によく見られるのが、玩具の取り合いです。

「これ使いたい！」「私も！」と気持ちをぶつけ合いながら力いっぱいやりとりをする姿があります。普段はにこにこ可愛い表情の子どもたちも、この時は眉間にシワを寄せて真剣な顔。無事に玩具を手に入れた時は誇らしげな表情を見せ、手にできなかった時には悔し涙を流すこともあります。

そんな姿からも、子ども同士で気持ちを主張し合い、やりとりができるようになってきた成長を感じています。

一方で、まだ言葉でやり取りするのは難しい子どもたち。使っていた玩具を取られてしまうこともあります。保育者が「貸して」「使ってるよ」と声を

かけて仲立ちし、気持ちを代弁しながら少しずつ言葉を覚えてもらえるようにしています。

給食の時間にも変化が見られます。以前は欲しいものを「うー！」と大きな声で伝えていたのですが、最近はわざと汁物をこぼしてみたり、椅子の上で立ってニヤリと笑ってみたりと、様々な方法で気持ちを表すようになっています。

「おかわりが欲しいときは座ってほしいな」と声をかけると、すぐに座る姿があり、大人の言葉をしっかりと理解しているのを感じます。

まだまだ小さなこもれびさん。時には大人も参ってしまうような場面もありますが、一つひとつのやりとりを大切に、良し悪しを伝えながら丁寧に向き合っていきたいと思っています。

Text by Mami Mizukoshi



「やってみたいをカタチに」 したお泊まりキャンプ

text by Satomi Hiramoto

今年、KIDS SMILE LABO で初めて挑戦したお泊まりキャンプ。

以前日比野設計に勤めていた池谷さんとのご縁で、東京都あきる野市の「養沢センター」へ、年長児6名とともに1泊2日のキャンプに行ってきました。

子どもたちと「やってみたいこと」「食べたいもの」「遊びたいこと」を話し合いながら計画を立てたため、一人ひとりの思いが詰まった特別な2日間となりました。

当日までの準備では、しおりをしながら持ち物を揃え、期待を膨らませていた子どもたち。

園から施設までは電車とバスを乗り継いで約2時間半。移動中は外の景色を楽しんだり、駅名を読み上げたり、歌を歌ったり、しおりで予定を確認したりと、笑顔いっぱいでお出立できました。



体調万全！
笑顔でお出立しました。



道中はずっとハイテンション！



養沢センターに到着し、おうちの人の握ってくれたおにぎりでパワー満タン★



ニジマスのつかみ取りにチャレンジ！

川遊び

現地では、池谷さんのご家族（こうたろうさん、奥さまのようこさん、お父さまの「ます先生」）が全面的にサポートしてくださいました。

最初のイベントはニジマスのつかみ取り。「ます先生」から「ます体操」を教わり、生態や捕まえ方のコツを学んで挑戦。最初は苦戦していましたが、友だちと協力したり罾を作ったりして次々と捕まえることができました。ある子は「5匹捕まえた！」と得意げな表情を見せ、ぬるぬるするのが苦手だった子もクーラーボックスに入れることに挑戦。何度も話したくなるくらい特別な経験となり、自信を得る姿がありました。

捕まえたニジマスは塩焼きにさせていただき、「皮がパリパリ！」「めだまがおいしい！」と夢中になって味わいました。

川では、ヘビトンボの幼虫や大小のカニ、岩下に住むカジカやアブラハヤ、さらには「謎の生き物」との出会いもあり大興奮。大きな水槽で観察していると、カニがヘビトンボの幼虫を捕食する様子なども見られ、自然の生態を間近に感じることができました。ボートで探検したり、川下りやライフジャケットで浮かんで流れを楽しんだり、普段できない体験に大喜び。

さらに、夏祭りで作った手ぬぐいを使ってスイカ割りにも挑戦し、友だちの声を頼りに少しずつ割れていくスイカに大盛り上がり。最後は保育者の一振りで見事に割れ、みんなで味わいました。

冷えた体を焚き火で温めながら、思い切り川遊びを満喫しました。



お次はボートに乗って気分は探検家♪



生き物探しに夢中になったり



パリパリのニジマスをパクッ！



楽しみにしていたスイカ割り！



焚き火で冷えた体もポカポカ



お風呂の後は就寝準備をして

キャンプファイヤー

川遊びの後はカレーづくりと入浴を済ませ、夜はキャンプファイヤー。

「火はどんな時に使う？」という問いかけに「料理のとき」「あたたまるとき」と子どもたちは答え、火の便利さと危険性を学びました。

その後、2人1組でトーチ棒を持ち、仲間から火を受け取り焚き台へと炎をつなげていきました。

炎を囲んで「もえろよもえろ」「夕焼け小焼け」「キャンプだホイ」をだいちクラスオリジナルの振付で歌い、心をひとつに1日を振り返りました。楽しかったことを仲間と共有し合う時間を持ち、思い出をみんなで確かめることができました。

さらに、手持ち花火や打ち上げ花火を楽しみ、子どもたちが歌いたかった「こたえあわせ」と「それもいいね」を歌って、特別な夜を締めくくりました。

みんなで作ったカレーや梅シャーベット、串焼きの焼き鳥やとうもろこしなど、自分たちのリクエストでそろえたごちそうで大満足の2日間。

帰り際には「まだあそびたい！」「明日も遊びたい！」と「嘘泣き」をして笑い合う姿も見られました。

大きな怪もなく、たくさんの生き物との出会い、自然の中での挑戦、仲間との協力を通して、子どもたちは心も体も大きく成長し、忘れられない経験を重ねることができました。

初めて親元を離れて過ごす中で、不安や寂しさを抱えながらも、友だちや保育者と支え合い、笑顔や達成感へと変えていった姿からは、大きな自信が感じられました。

今回の経験は、子どもたちにとってかけがえのない「力」となり、今後の園生活や小学校生活へとつながっていくと思います。

このような機会をともに過ごせたのは、日頃からあたたかく見守りご協力くださる保護者の皆さまのおかげです。心より感謝申し上げます。



暗くなったら
お待ちかねのキャンプファイヤー



カレー作りをしました。



みんなでラジオ体操♪



火を囲んで
今日を振り返りました。



花火も楽しみました！



朝から川で思い切り遊びました★



楽しみにしていた
梅シャーベット！



最高の2日間！最高の仲間！



IDEA R LAB

岡山県倉敷市玉島中央町3丁目4-5
080-486-2320
instagram @idearlab2020



モノの命が生まれ変わる、 日本のクリエイティブリユース拠点

text by Takashi Mori

@idearlab2020

KIDSMILE LABO にもクリエイティブリユースの場をつくりたい。「IDEA R LAB」を訪れたことで、その思いはさらに膨らみ、確信へと変わった。

以前に、千葉大学墨田サテライトキャンパスで開催されている「あそび大学」を訪れたときも同じように感じたのだが、そこには確かに「人の心が動く場所」の力があつた。

大月氏の話から、一人の思いだけで場を続ける難しさを知ると同時に、人が関わり合い、知恵や感性を重ねることで生まれるモノやつながりの豊かさに強く心を打たれた。そこにあるのは単なる素材ではなく、人の心を動かす資源の生かし方そのものである。保育もまた同じだ。子どもや大人の思いを受け止め、試行錯誤を重ねながら場を耕す営みこそが、育ちを支える土壌になる。

がむしゃらでも構わない。小さくても自分なりの形で始め、続けていくことに意味がある。今回の研修は、その覚悟を改めて胸に刻む時間となった。

「あげたり、もらったり、なおしたり」
——不要になったモノの物々交換・リユースの場。
元々は、Facebook で始まった交流をリアルなスペースに昇華し、2017 年頃より運営している。

1 Material Library

廃材や端材を分類・整理し、クリエイティブに使える「素材」に仕立てたストック施設。足を踏み入れた瞬間、再びわくわくとした気持ちが湧き上がった。「子どもたちがこの空間に足を踏み入れたら」と、想像した時に思わず笑みがこぼれた。ここにあるものは、廃材ではなく、間違いなく子どもたちにとっての宝物だ。

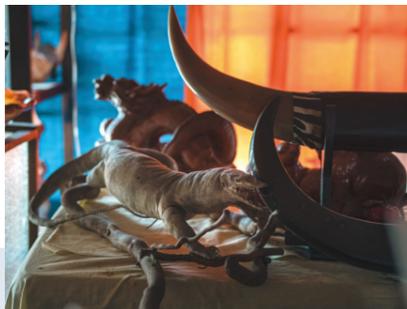


Introducing Related Facilities

3 つの関連施設紹介

2 アゲモラプロジェクト

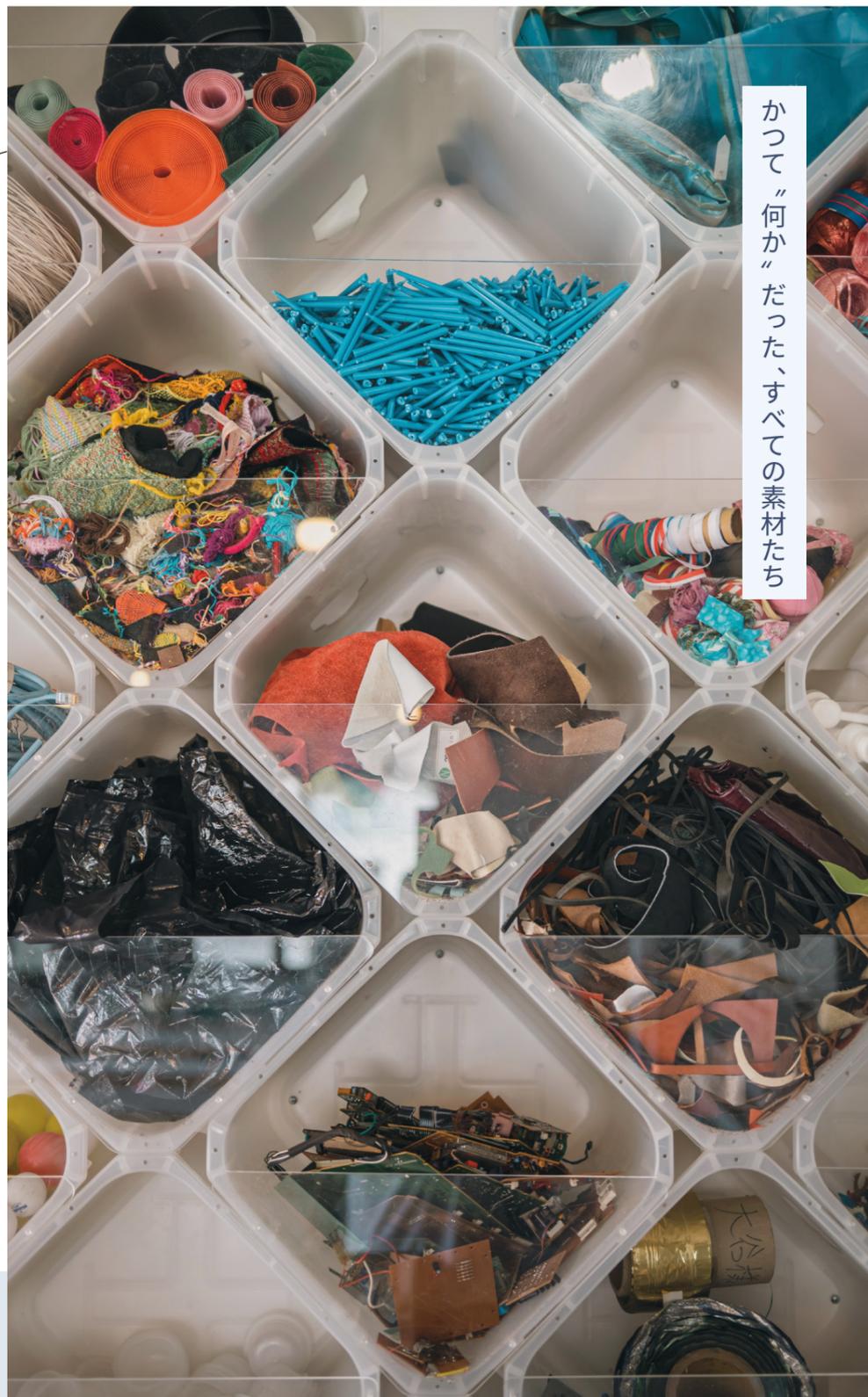
「あげたり、もらったり、なおしたり」
——不要になったモノの物々交換・リユースの場。
元々は、Facebook で始まった交流をリアルなスペースに昇華し、2017 年頃より運営している。



誰かの役目を終えたものが、別の誰かのもとで新たに息を吹き返す。その順番を待っているモノたちの多さに、ただ驚かされた。けれど同時に、そこに並ぶ数以上に、行き場を得られずに捨てられていくものがあるのだと突きつけられた気がした。

3 玉島マチヲプロジェクト

「玉島マチヲプロジェクト」として、笠岡市在住のアーティスト・川埜龍三さんがアパート一室をまるごと作品化。架空の人物・玉島マチヲ（玉島生まれ、玉島育ち）が住んでいる部屋「オレンジハイム 103 号」は、様々な写真でコラージュされた摩訶不思議な空間が印象的だ。その2階にあたる「オレンジハイム 203 号」では「シェアアパートプロジェクト」を実施。廃材で作ったイスなどで彩られた空間に宿泊もできるとのこと。



かつて「何か」だった、すべての素材たち



岡山県倉敷市・玉島にある「IDEA R LAB」
(主宰：大月ヒロ子氏)
家庭や工場などで「捨てられてしまう」廃材を、人の想像力で「まったく新しいもの」に生まれ変わらせる「クリエイティブリユース」を軸に運営されている拠点。